

相馬復興の恩人

## 二宮尊徳翁



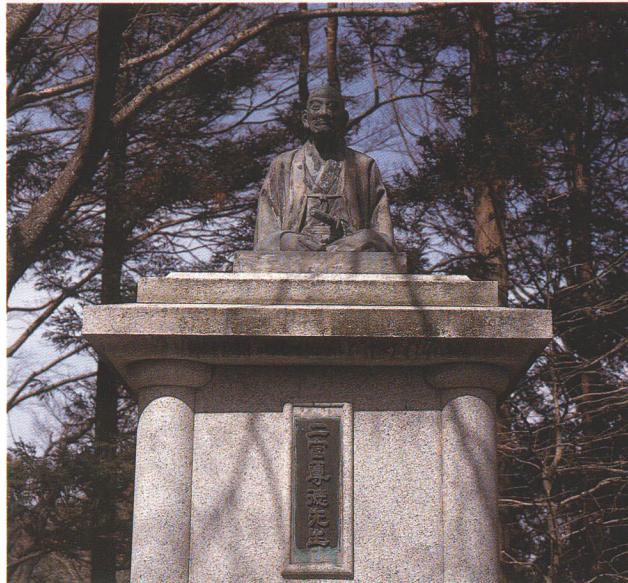
江戸時代の後期、冷害による凶作が続きました。中でも、天明・天保の大ききんで、相馬領内の田畠が荒れ、人口は最盛期（約九万人）の約三分の一に激減するなど、かつてない大被害を受けました。

この荒れはてた大地を緑豊かな耕地に、また、冷えきった民・百姓の心を人間性豊かなものにかえていったのが、二宮尊徳翁の訓えである「興国安民の法」（御仕法）でした。

御仕法は、相馬では弘化二年（一八四五年）に坪田・成田両村に初めて採用され、以来、明治四年までの二十七年間に、領内二百二十六カ村のうち百一カ村で実施されました。そのうち五十五カ村で完成をみています。

当時、相馬藩には藩主の充胤をはじめ、藩主の師・慈隆、家老の草野正辰、池田胤直、熊川兵庫ら、御仕法の良き理解者がいました。また、富田高慶、斎藤高行、荒専八らの藩士が尊徳翁の下で学んでいました。これらの人々が、力を合わせて完成させたのが相馬の御仕法でした。御仕法を実施した所は全国に六百カ所あります。最も理想的に行われたのは相馬である、といわれています。

偉大な農政家であり、村おこしの先達である尊徳翁が他界された時、相馬藩では、翁の遺髪を中心城の近くの愛宕山にねんごろに葬りました。その後、城跡の一角に翁の座像が建立され、偉大な尊徳翁の訓えを後世に伝えていきます。



## 愛宕山史跡

伊弉再尊と火産靈尊を祭神とする愛宕神社

をはじめ、相馬藩内子弟を教育し、多くの俊才を輩出した金蔵院、十九代藩主忠胤が武運長久を折つて建立した觀音堂、出羽の名工、上杉主殿頭作の地蔵堂などの史跡があります。また二宮尊徳と慈隆の墓もあります。

